円山動物園×札幌市立大学の20年

20 Years of Sapporo Maruyama Zoo and Sapporo City University: 2006–2025

01

（ ）内は担当教員。役職は2026年4月時点

●円山動物園との連携開始（2006）

札幌市立大学の開学に合わせ、受託研究などを通じて、円山動物園との連携が始まりました。
減少しつつあった動物園の来園者数を、デザイン学と看護学の連携によって回復させることを目指しました。

●アニマルファミリー制度の開設（2006~2008）

お気に入りの動物に家族のような愛着を持っていただくため、市民から支援を募る制度です。ファミリー（支援者）からの会費は、動物たちを育むエサ代として利用されることになっています。「わたしの動物を動物園に預かってもらっている」「わたしの家族に会いに動物園へ行く」と思ってもらえるよう、入園者の皆様と動物園の新しい関係を提案しました。

（原田昭初代学長）

ホッキョクグマ「ララ」／チンパンジー「レディ」／オランウータン「弟路郎（テイジロウ）」／ライオン「リッキー」
レッサーパンダ「ココ」／シンリンオオカミ「キナコ」／カバ「ドン」／マサイキリン「ナナコ」

アニマルファミリー対象動物

●スネークアート展（2006）

透明な飼育箱や小型カメラを使って、ヘビの模様や肌の美しさを至近距離で観察できるように展示しました。恐れられがちなヘビの魅力を、芸術のような視点で体感できる新しい手法を提案しました。

（本田直也非常勤講師・細谷多聞教授・三谷篤史教授・齊藤雅也教授）

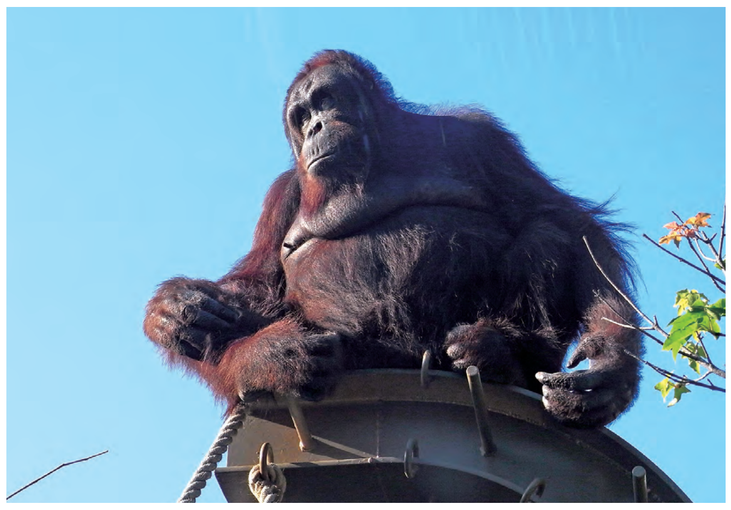
スネークアート展のようす

●類人猿館屋外放飼場（2008）

円山動物園の類人猿館（当時）では、光や熱など「目に見えない環境」を丁寧に設計し、動物たちが安全で快適に過ごせる空間づくりが行われています。特に爬虫類や両生類のように環境が生死に直結する動物にとって、この調整は非常に重要です。多様な専門家が協力して飼育環境を整える取り組みは、地域に専門性を還元するだけでなく、命の尊さや希少種の繁殖の喜びを再認識させてくれる貴重な経験にもなっています。

（酒井正幸名誉教授・齊藤雅也教授・片山めぐみ元准教授）

屋外放飼場全景



ボルネオオランウータンの「弟路郎（テイジロウ）」

放飼場内部

札幌市立大学
SAPPORO CITY UNIVERSITY

円山動物園×札幌市立大学の20年

20 Years of Sapporo Maruyama Zoo and Sapporo City University: 2006–2025

02

（ ）内は担当教員。役職は2026年4月時点

●こども動物園（2008）

こども動物園の一部を改修し、エゾリスなど北海道に生息する動物を飼育するドサンコの森をはじめ、ビーバーの森、ウサギ・ニワトリ牧場をあらたに整備しました。動物とのふれあいを通じて「いのちの大切さ」や癒しを伝えることを目的としています。

（酒井正幸名誉教授・齊藤雅也教授・片山めぐみ元准教授）

こども動物園

●エゾシカオオカミ舎（2008）

エゾシカとオオカミ獣舎では、北海道の森を再現した環境で、かつて食物連鎖の中で共存した両者を同じ施設内に展示しています。ガラス越しの観覧や放養場での近距離観察、森の匂いの演出など工夫が多く、バリアフリー設備も整えられています。

（酒井正幸名誉教授・齊藤雅也教授・片山めぐみ元准教授）

エゾシカ・オオカミ舎

●園内カフェ「ネイチャーカフェ『アース』」（2008）

「ネイチャーカフェ・アース」は、札幌市と北海道コカ・コーラ㈱の協定にもとづき、環境について考えるきっかけを提供するカフェです。安全でおいしい食と癒しの空間に加え、学校や企業と連携した情報発信や大型スクリーンでの環境メッセージ上映、体験型イベントを通じて、自然や動物、人とのつながりを考える場をつくっています。

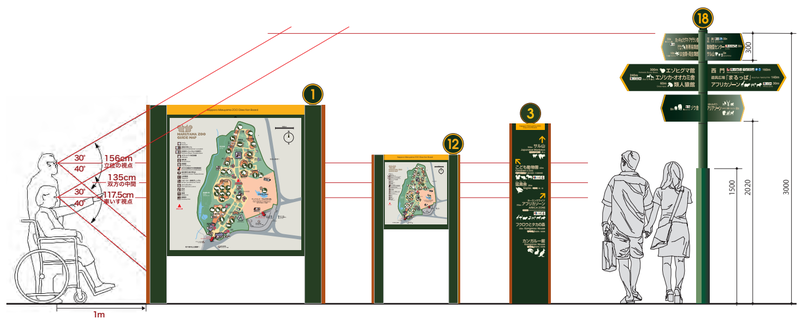
（齊藤雅也教授・山田良元教授）

ネイチャーカフェ『アース』

●園内サインデザイン（2008~2018）

園内の全体マップ、現在地マップ、誘導サインなどをユニバーサルデザイン視点から全面リニューアルしました。NUDA（北のユニバーサルデザイン協議会）のみなさまの協力により、車椅子での来園者にも見やすいマップを心がけました。

（吉田和夫名誉教授・酒井正幸名誉教授・大渕一博講師・柿山浩一郎教授・金秀敬准教授・小宮加容子准教授・張浦華元准教授）



園内全体マップ

園内の数箇所に設置された全体マップ

矢羽型サイン

札幌市立大学
SAPPORO CITY UNIVERSITY

円山動物園×札幌市立大学の20年

20 Years of Sapporo Maruyama Zoo and Sapporo City University: 2006–2025

03

（ ）内は担当教員。役職は2026年4月時点

●自然体験ゾーン円山動物園の森（2009）

円山原生林に隣接し開園以来手付かずのまま残されていた自然林を広大なビオトープとして整備し、半世紀前に存在した札幌の身近な自然環境の再現を目指しました。またこのエリアを市民と自然とのふれあいの場とするため、林内の在来生物種の調査研究と保護、自然ガイドボランティアの育成、遊歩道や観察拠点の整備などを継続的に実施しました。

（矢部和夫名誉教授・酒井正幸名誉教授）

円山動物園の森

●エゾヒグマ館（2010）

エゾヒグマ館は、北海道の山林景観をモチーフにしたランドスケープ型デザインを採用しています。起伏のある地形や岩場、水辺を組み合わせ、エゾヒグマの行動多様性を引き出す空間構成としました。観覧通路は視線の高さや距離感に配慮し、自然の中でクマと向き合う体験を演出しています。（片山めぐみ元准教授・木戸環希元札幌市立高等専門学校講師）

エゾヒグマ館

●は虫類・両生類館（2011）

「は虫類・両生類館」には、ミストを発生させる装置によってタイマーで1日に4回、雨を降らせることができる展示室があります。また、空調ではなく放射暖房を採用することで、保湿性、断熱性などをコントロールしています。このように生息地に近い気候を作り出し、希少な動物を展示しています。（齊藤雅也教授・本田直也非常勤講師）

館内ラボ

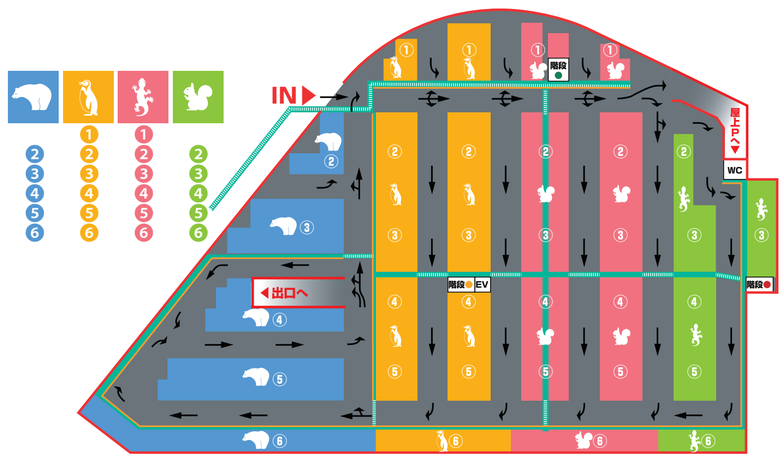
は虫類・両生類館

は虫類・両生類館オープン記念講演会ポスター

●西門周辺のアプローチデザイン（2011~2014）

西門駐車場内の誘導サインと駐車場から動物園西門までのルートについて、ユニバーサルデザインの観点から、歩行者やベビーカー利用者にやさしくわかりやすいデザインを考えました。

（吉田和夫名誉教授・酒井正幸名誉教授・柿山浩一郎教授・小宮加容子准教授・大渕一博講師）



西門駐車場内サイン提案

札幌市立大学
SAPPORO CITY UNIVERSITY

円山動物園×札幌市立大学の20年

20 Years of Sapporo Maruyama Zoo and Sapporo City University: 2006–2025

04

（ ）内は担当教員。役職は2026年4月時点

●アジアゾーン 寒帯館/高山館/熱帯雨林館（2012）

アジアゾーンは、アジア各地の森林や草原を想起させる景観一体型のデザインを特徴としています。植栽や起伏、水辺を活かし、動物の生息環境を立体的に再現。来園者は回遊動線を通じて、自然の中を歩きながら動物と出会う体験ができるよう工夫しています。

（片山めぐみ元准教授）

アジアゾーン「高山館」

●遊具広場まるっぱ（2013）

園内にある遊具広場「まるっぱ」は、さまざまな動物の大きさや習性を遊具で遊びながら体感できます。来園した子ども達がのびのびと自由に体を動かして遊ぶことで、動物の気持ちを身体的に感じられる遊び場の実現を、デザイン学部教員らが監修しサポートしました。

（福田大年准教授・小宮加容子准教授）

遊具広場まるっぱ

●アフリカゾーン キリン館/カバライオン館（2015）

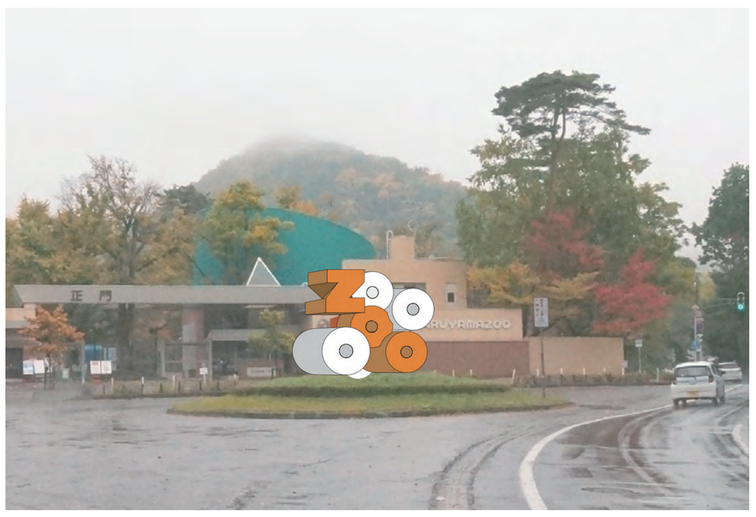
ライオン・キリンなどのアフリカのサバンナ気候下で生息する動物の暮らしを再現し、希少種の繁殖を目的に計画されました。設計にあたっては、飼育動物に配慮した建築環境デザインと、来園者の高揚感を創出する生体展示デザインの２点を重要項目としました。

（齊藤雅也教授・福田大年准教授）

アフリカゾーン「キリン館」

●地下鉄円山公園駅～正門へのアプローチデザイン（2015~2018）

札幌市円山動物園入園までの「わくわく感創出」を目的として、地下鉄円山公園駅から円山動物園までの木道等における誘導サインと、円山動物園正門前広場のモニュメント（オブジェ）製作と総合サインについて提案を行いました。（吉田和夫名誉教授・酒井正幸名誉教授・大渕一博講師）



正門前オブジェ 設置提案

●北海道ゾーン〈整備検討〉（2018~2021）

円山動物園の北海道ゾーン計画では、北海道の野生動物を総合的に展示し、その魅力や多くの生物を育む自然環境を来園者にわかりやすく伝え、北海道や札幌市内の身近な動物の保全に資することを目的としています。現在、生物多様性に配慮した生息・飼育環境を整備するためのサイトプランおよび展示環境のデザイン検討を進めています。

（大島卓准教授・齊藤雅也教授・本田直也非常勤講師）

北海道ゾーン 整備提案

札幌市立大学
SAPPORO CITY UNIVERSITY

円山動物園×札幌市立大学の20年

20 Years of Sapporo Maruyama Zoo and Sapporo City University: 2006–2025

05

( ) 内は担当教員。役職は 2026 年 4 月時点

●ホッキョクグマ館 (2018)

ホッキョクグマ館は北極圏に暮らすホッキョクグマとアザラシを展示する施設です。水中トンネルでは、別々のプールにいる2種が一緒に泳いでいるように見え、多角的に観察できる工夫も多数あります。国際基準（マニトバ基準）に沿って設計され、以前より広く快適な環境で動物の福祉にも配慮した施設となっています。

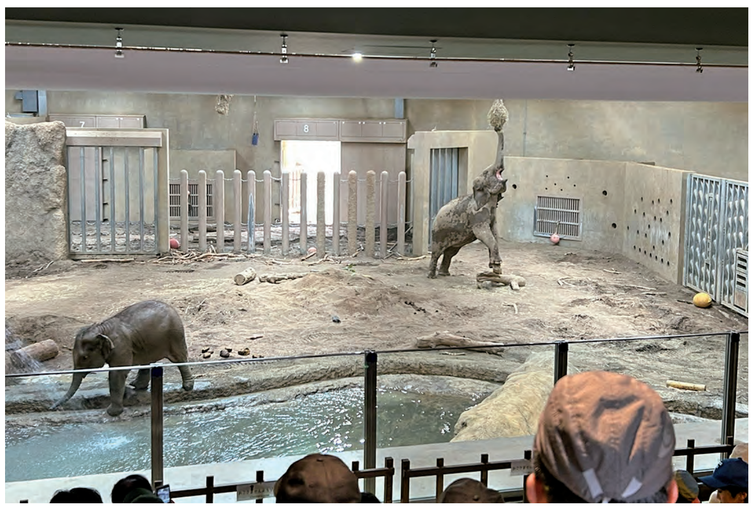
（福田大年准教授・齊藤雅也教授）

ホッキョクグマ館

●アジアゾウ舎 (2019)

暖房や照明など省エネルギー性に配慮しすると同時に、来園者の高揚感を創出する魅力的な展示サイン、誰もがゆっくりと観覧して楽しめるユニバーサルデザインの視点も導入して設計しました。特にわが国では初の「準間接飼育」手法を導入しました。

（酒井正幸名誉教授・齊藤雅也教授・福田大年准教授・石田勝也講師）



室内展示場

放飼場全景

アジアゾウ

●動物科学館〈改修検討〉(2020~2022)

次世代エネルギーパークとしての円山動物園では、動物とのふれあいを通して命とエネルギーの関わりを学び、太陽光など新エネルギーを体験できる環境教育の場を提供しています。動物科学館には、再生可能エネルギーに関する展示コーナーがあり、体験しながら学ぶことができます。

（矢久保空遥助教・柿山浩一郎教授・福田大年准教授）

●こども動物園におけるメディアデザイン (2022~2023)

予備調査として、未就学児から小学校高学年の子どもとその保護者を対象にアイトラッキング分析を行い、冬季の「こども動物園」の利用実態を明らかにしました。エリアごとの滞在時間と注視の頻度が正の関係にあること、会話内容によって注視の長さに有意な影響があることが明らかとなりました。（石田勝也講師・須之内元洋講師・並木翔太郎准教授）

こども動物園での調査のようす

札幌市立大学
SAPPORO CITY UNIVERSITY

円山動物園×札幌市立大学の20年

20 Years of Sapporo Maruyama Zoo and Sapporo City University: 2006–2025

06

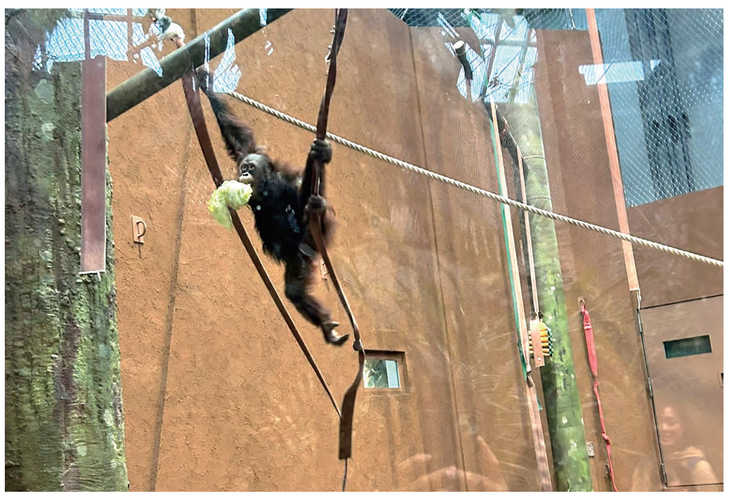
（ ）内は担当教員。役職は2026年4月時点

●オランウータンとボルネオの森（2024）

ボルネオオランウータン生息地の気候を寒冷地・札幌の屋内施設で再現するために、外断熱工法など様々な技術が採用されています。この新施設では、活き活きとしたオランウータンの動き、植物の成長が見られ、多くの来園者に親しまれる空間になっています。（齊藤雅也教授・本田直也非常勤講師）

放飼場全景

室内展示場



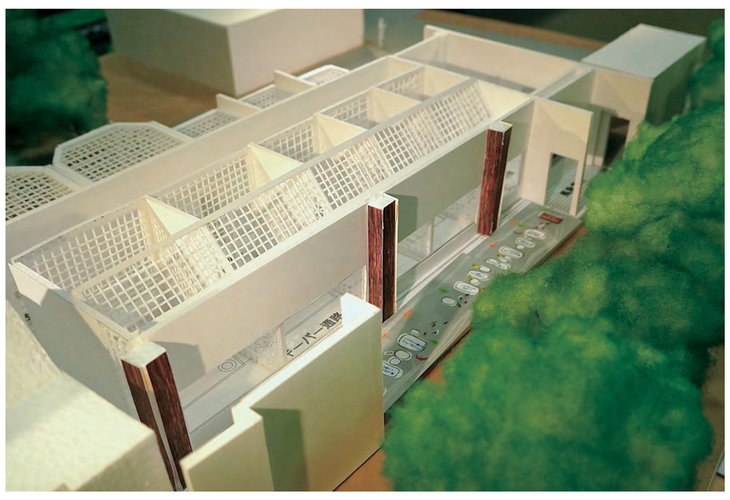
ボルネオオランウータンの「レイト」

●モンキーハウスの来場者満足度向上を目指す取り組み（2024~）

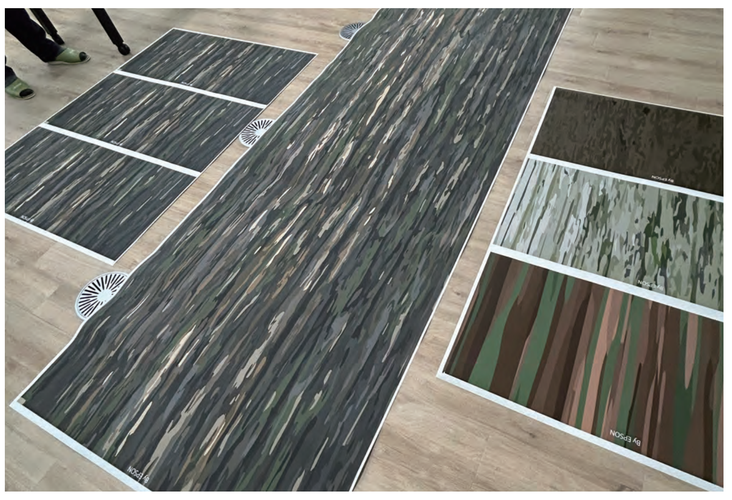
円山動物園のモンキーハウスでは、近年、来場者視点での見せ方に課題がありました。そこで、来場者にこれまでにない見学体験を提供するため、ユーザー体験の再構築を図りました。具体的には、UXデザインの観点から、動物福祉に配慮した環境エンリッチメントの視点を取り入れ、動物を五感で感じ取るための仕組みや、来場者の好奇心と学びを自然に喚起する体験設計を行いました。これらの要素をひとつの物語として、より深く楽しく、リアルに動物と向き合える場の創出を目指しました。最終的には、その構想を試作として具現化し、新たな動物園の体験の可能性を示しました。

（伊藤健世教授・吉田彩乃助教・坪内健元助教・齊藤雅也教授）

発表会（装着できるしっぽなど）



模型とスゴロクを敷いたイメージ



一体感を感じられる空間環境

エントランス花壇